

翠物七ヶ条

特 259

105

350
667



特259
105

○
習
物
七
條

○習物七ヶ條

一 昇り胸大巻の幸

昇りの胸は、お糸より胸に昇りて同一ものを挿すまゝあり。

各律書の胸に今一此の昇り胸の流成は、お糸より同一ものにて縁を繋げる幸あり。之を大巻

ひとよふ。又胸に昇らざるお糸を流成は、お糸より立つる幸あり。



下段大巻ひとよふ。お糸は縁切れぬやうに廻向あるべし。



お糸をお糸に用ひす。一 胸に昇りてお糸よりかへる昇りの胸及大巻は、お糸にかへる幸あり。

「爰より内見越大内公越の年。
下段除きお際除きふ書
の爰し一難きから時高き人
を用ふ。爰よりは七九の音見
爰は難きものにて爰の持
を減すべし。通書名越は
て、其の海はつらう候し。
これどいほの越向はつらう
海はつらうたがも。又俗に
真がつらうは其の後よ高
く除きふ事あり。是律よま
ある可し。高きは爰全しれ
枝のつらうは、又し枝は見
越の跡はつらう事よりたも
時の越向はつらう爰に
は真のつらうはつらう事よ
あらん。

時の越えは、（？）の越えは、（？）の越えは、（？）の越えは、

は、（？）の越えは、（？）の越えは、（？）の越えは、
あらん。

内々越は、（？）の越えは、（？）の越えは、
見越し、（？）の越えは、（？）の越えは、
内々より、（？）の越えは、（？）の越えは、
は、（？）の越えは、（？）の越えは、
上候より、（？）の越えは、（？）の越えは、
は、（？）の越えは、（？）の越えは、
からん。

大内見越は、（？）の越えは、（？）の越えは、
又は、（？）の越えは、（？）の越えは、
に、（？）の越えは、（？）の越えは、
越と、（？）の越えは、（？）の越えは、
常、（？）の越えは、（？）の越えは、
一の、（？）の越えは、（？）の越えは、
あらん。

「水仙なげ舞葉の草」

なげ舞葉といふて、おの幹に
たゞふて舞葉は二枚おのり
長く挿くおの草あり。

おは常のおのり少く短くおす
草なげ舞葉といふ、力を補
ふまゝ。又なげ舞葉はより

にておのりまゝあり、是律
ユまあるべし。是はおのり
なるおのり挿く、凡おは

秋の終りのおのり挿く、是
るまゝておのりおのり
舞葉の舞の終りに、おのり
おのりおのりおのり。

「藤かけおの草」

藤を真に、おの草に

おの真に、藤を、おの草に

おの真に、藤を、おの草に

藤と真に...

松の真に纏るや葉白く
すれどもよし。松の真に
はむして青葉を用ひの
枝に赤葉又ハ相越るど
叶使ひ程くまらぬ。藤
のみそは力足らざるが故
松に纏はす葉なると。山真
れよに藤の老をせめてよ
りからん。松の真にならば
故ありなも松に限らず葉物
は藤と藤の老を方心得ある。
一と藤一葉の事

一瓶の葉調はさる時刻
名越の許へ活一枝をて
安直ぐに補ふ事あり。是
をば彼葉といふ是ハ活

小浪うたふ各様姿あはれに
用ふる葉ありし菊に添へ生
る葉より一、二枚用ふ所陰
陽調ふ故に落ふより後葉を
は遊ぐ。但一後葉ははら葉
をこしにら得あつてし。

二二枚大葉の葉

二枚大葉の後ろ大葉を
ひの極あり。僅かに大葉を
名越下割した用ふ但一
陽をえらるなり。流の方
又ハおの方いづれ本をり
あつた方に葉物の数本厚
又は通用物をもし能く
いかにあつたなど、主に陰を
見せて用ふ。

但一葉の葉に一枚より下

二二枚大葉の葉

いかにふかたなまの陰を

見せて用ふか。

但此の葉に夜よりよ下
にてお枝にふる葉ありたも
後よりおす大葉すぐれた
いかりものあらは者ら
七の難

二谷茶の葉

此の葉は桐と松と今物又
前と後と人う物にて葉
が下と葉あり難き時に挿
す葉あり其の時葉を流の
後らかおの後らに下すべし
此の葉は後らに松か松の葉
をあらは後らは木の縁な
る葉とある。一瓶の内流お
は少く前へ挿すべし。葉は
通ひ易く茶葉は定むる茶

故おし難き時に其の谷
草と揮す事にて好んで揮
す事ふとあらん。

○右七条係執心
令相傳ふ事。神心
可也知也云也

法陽六爾堂

池宿

昭和

年

專啓

秀



終

